

## フランス語圏翻訳奨励 30 作品(小説部門)

フランス語圏の小説は今日、世界文学の仲間入りを果たしています。アンスティチュ・フランセ日本は皆様に、日本では未翻訳のフランス語圏の小説から選り抜きの 30 作品をご提案させていただきます。これらの作品を翻訳する企画については、以下の助成制度が優先的に適用されます。


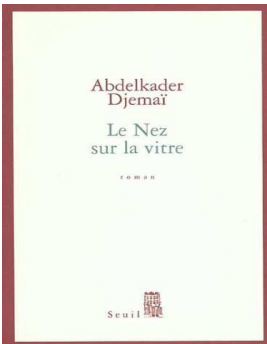
- PAP 翻訳出版助成金プログラム
- 翻訳者のための滞在給費制度(CNL 仏国立書籍センター)
- フランス大使館/IFJ 指定の作品・作家に対する助成

詳しい内容については、アンスティチュ・フランセ日本 WEB サイトをご覧ください。

<http://www.institutfrancais.jp/traducteurs/>

### 地中海 – マグレブと近東

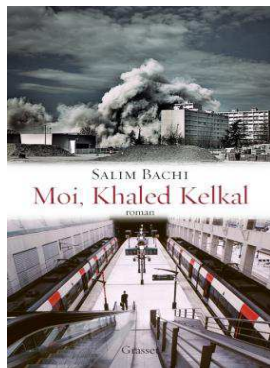
#### アルジェリア

	<p>レイラ・セッパール、『兩岸の沈黙』、ストック、147 p. 1993 年カテブ・ヤシヌ賞</p> <p>南フランスのどこかで、死を目前にして、ある男が川を遡っている。まるで自分の人生を遡るように。「彼岸(あちら)」の色彩と言葉が、すなわち生まれた地の色彩と言葉が、地中海の「彼岸(あちら)」の記憶が戻ってくる。しかし亡命するということは、最後の時に、二つの世界を結ぶ太古からの通過儀式を、そしてこの本においては、神秘につつまれ運命をつかさどるパルクのような三人姉妹が「彼岸(あちら)」に残った者たちに与える通過儀礼、をもたないということなのだ。</p>
	<p>アブデルカデール・ジェマイ、『ガラス窓のすぐ後ろで』、スイユ、2005 年 高校生が選ぶスタンダール賞、地中海圏アフリカ/マグレブ文学賞</p> <p>ある夏の朝の白々とした光の中で、男が一人、手紙の返事が来ない息子に会いに長距離バスに乗る。南仏から始まり、ある大河の河川沿いにある街への、この個人的な旅行の間に彼は、自分の父、戦争、アルジェリアでの幼年時代の風景、貧困、そして初めて海を見たことなどを思い出すのだ。旅の行き着くところでは、バスの窓と自分自身の存在の向こう側に、影と沈黙でできた彼自身のあの部分を再び見出すのであろう。</p>



ブアラム・サンサル、『ドイツの村、あるいはシレー兄弟の日記』、ガリマール、304 p.  
2008 年 RTL-Lire 賞、2008 年フランコフォニー大賞

実話をもとにしたこの小説は、プリモ・レビの思想に影響を受けた熱烈で深い内省をしめしている。とても異なっているようで似たところのある三つのエピソードが一体となっている。大量殺戮という怖気をもよおす現実を知るアラブ人の少年のまなざしを通したシヨア、1990 年代のアルジェリアにおける悲惨な戦争、フランスにおける郊外と特にフランスに二世代前から暮らしているアルジェリア人の次第に深刻化していく劣悪な生活の状況である。



サリム・バチ、『私、ハレド・ケルカル』、グラッセ、140 p.

「中では、全ての明かりが消えていた。地獄のような窪みの中に降りていく階段を、わずかな光の反射だけがたよりで、ようやく見ることができた。まさに列車が止まったところである駅の奥深くまでたどりつくために、彼らはライターに火をつけていた。」

1995 年。サン・ミッシェル駅で爆弾が炸裂した。死者 8 人、および負傷者 100 人以上。全ての新聞の一面に 24 歳のテロリスト、ハレド・ケルカルの顔写真が掲載された。この青年は国民の敵ナンバーワンと名指されたのだ。このにこやかで控えめなよい生徒が、どうしたら殺人者になれたのか。

死者たちのもとから戻ってきたハレド・ケルカルが、社会を、彼の育った郊外、フランス、そしてアルジェリアを弾劾する。そしてこの取り返しのつかない罪を犯すまでに彼を導いた悲劇的な運命と宿命を自ら呪うのである。

#### その他の推奨作家：

マイッサ・ベ

ヤヒア・ベラスクリ

ラシド・ブウジェドラ

マリカ・モケデム

アミン・ザウイ

スウミヤ・アマール・コジャ

ベナマル・メディエーヌ

アマール・コジャ

## モロッコ



アブデラ・タイア、『王の日』、スイユ、216 p.  
2010 年フロール賞

1987 年、今だ戦禍の恐怖の中にあるモロッコで、ハッサン II 世がラバからサレへと向かう日が来る。群集に埋もれながら、二人の友、オマールとハリドが王を待っている。オマールは裕福で、王の手に接吻をする役を与えられている。貧しいハリドはそれが妬ましい。そこに階級間闘争が生まれる。そしてこの戦いは森の真ん中で、血を流して終わることになる。

	<p>マヒ・ビネビネ、『シディ・ムーメンの星』、フラマリオン、153 p. 2010 年 マムニア文学賞</p>
	<p>マヒ・ビネビネは作家であり、画家、彫刻家としても活躍している。</p>
	<p>ヤシーヌはカサブランカのはずれにある街、シディ・ムーメンでの、10 人兄弟、貧困と戦う母、かつては労働者であったが今では宗教にすがりつくばかりの父とともに過ごした少年時代を語る。公共ごみ捨て場、大麻、シンナー吸引…この街は地上の地獄だ。それじゃあ、天国がつい向かいの扉の向こうにあると言われたら、何を迷うことがあるだろう？</p>

## チュニジア

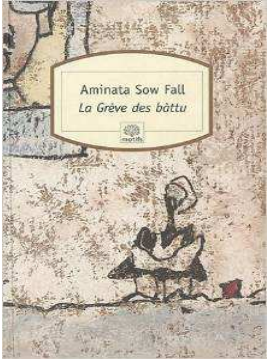
	<p>ユベール・アダッド、『パレスチナ』、ズウルマ、160 p. 2008 年 フランコフォニ五つの大陸賞、2009 年 ルノー・ポッシュ賞</p>
	<p>ハダッドは句集「屏風絵の俳句」とともに刊行された「屏風絵画家」(ズウルマ、2013年)の作者でもある。 領地権と安全が確定していないヨルダン川西岸地区のあるところで、イスラエルのパトロール隊がパレスチナ戦闘部隊に襲撃される。一人の兵士が銃弾に倒れ、もう一人が戦闘部隊に捕えられるが、部隊はやがて敗走しはじめる…負傷し、ショック状態で、この捕虜はすべての記憶を失い、自分の名前さえも忘れてしまう。彼にとっては、鏡の中の世界だ。ただ一人の生存者であり、身分を証明するものもなく、平服にカフィエを被って、この青年はふたりのパレスチナ人の女性によって介護され、養子にされる。それ以来、彼の名はネッシム、拒食症の女子学生ファラステインの弟、そしてアスマハンの息子となる。アスマハンは異にはまって銃殺された政治的リーダーの盲目の寡婦だ。こうしてネッシムは占領されたヨルダン川西岸地区における苦悩と緊張を知り、生きていくことになる。</p>

## レバノン

	<p>ドミニク・エデ、『カマル・ヤン』、アルバン・ミシェル、464 p. 2013 年 アカデミーフランセーズ-アンナ・ド・ノアイユ賞</p>
	<p>2010 年夏、ヤン一家は家族内紛の状態にあった。マンハッタンの実業弁護士カマルはシリア情報局のトップである伯父に復讐を謀っていた。この伯父は 30 年前のハマの虐殺の際にカマルの両親を殺させたからだ。彼は同時に、CIA と和平を結んで、テロを実行する寸前のイスラム主義者の弟を救わなければならない。あちこちでアラブと西洋の両方の秘密情報部から操られ、カマルの組合員は全員異にはまり、その妻たちは影の存在でありながら、決定的な、そして容赦のない役割を果たすのである。恐らくこの小説こそ中近東での、家族と権力との絶対的な抑圧と相関関係の絡み合いを赤裸々に描いた最初の作品である。ヤンの呪われた家系は殺し殺しあうことを定めとしている。一方で、犠牲を強いられるばかりの民衆は、自由を夢見始めている。</p>

## アフリカ

### セネガル

	<p><b>アミナタ・ソー・フォール、『敗者のストライキあるいは人間廃棄物』</b> セルパンタ・プリュム、2001年、131 p. 1980年黒いアフリカ文学大賞</p> <p>ケバ・ダボは彼の勤める官庁で、「人間整理案」を実行する任務を担っている。すなわち、発展途上にある都市観光地化政策にとって具合が悪いという理由から、乞食たちを首都から追い出すという計画だ。上司のムールウンジャイはさらに主張する。今度は、ただの一人も路上に残したくない。そしてそのとおりとなった。しかし乞食たちも人間だ。屈辱に打ちのめされた彼らは、ストライキを起こすこと、もう物乞いはしないことを決めた。その日から、この出来事はこの国の社会生活に動転させる。いったい誰に祈りを捧げればよいのか。求める成功を得るためには、誰に善行を施せばよいのか。</p>
---	---

#### その他の推奨作家：

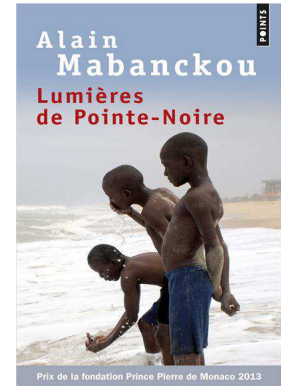
ママドゥー・マフマンド・ドンドンゴ

ハディ・ハネ

チェイク・ハミドゥー・カネ


ブバカール・ボリスディオップ ケン・ブグル

### コンゴ

	<p><b>アラン・マバンク、『ポワント・ノワールの光』</b>、スイユ、304 p.</p> <p>23年間の不在の後、アラン・マバンクは故郷コンゴのポワント・ノワールに戻る。母は1995年に亡くなり、養父の父もその後を追うように他界したが、一人息子の彼はそのいずれの葬式のためにも帰って来ていなかった。超自然的なことと魔術の間にあるようなできごとを、アラン・マバンクは彼の根源に潜むものとして読者に描き出す。それは、彼の故郷における幼年時代、そして思春期の思い出の数々である。この町を再び去るにあたって、彼はまだ両親の墓参りをしていなかったことに気づく。恐らくそれはすることもなかったこのなのだ。というのも、この本が墓参りの代わりとなるからだ。そして両親を蘇らせることにも。</p>
---	---

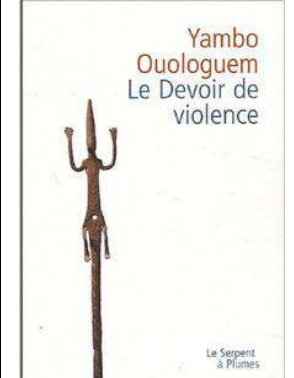
#### その他の推奨作家： ガブリエル・オクンジ / ヴァランタン・イヴ・ムディンベ

### トーゴ

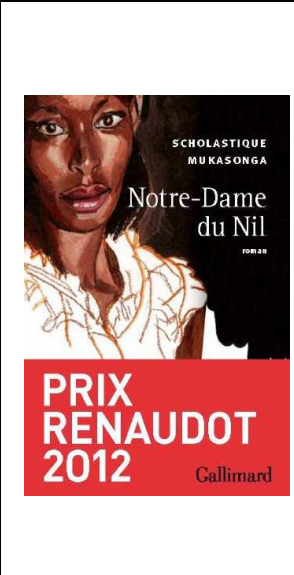
	<p><b>コッシ・エフイ、『ある幽霊のソロ』</b>、スイユ、160 p. 2009年トロピック賞、2009年アクマドゥークルマ賞、 2009年フランコフォニの五大陸賞</p> <p>10年間続いた虐殺の後、語り手は故国に戻ってくる。そして彼は友人モザヤがなぜ死んだのかを知るために、彼の学生時代に一緒に劇団を築いたアサフォという男を見つけ出そうとする。さそりのしっぽのようにとぐろを巻く、あの古の、死を招く「呪文」に取り付かれた生活が蘇る。</p>
---	--

#### その他の推奨作家： サミ・チャク

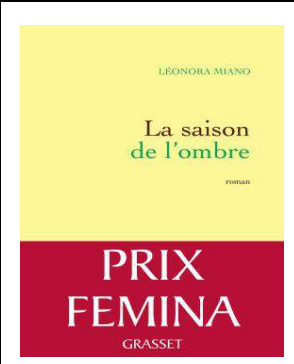
## マリ

	<p>ヤンボ・ウオロゲム、『暴力を行う義務』、セルバン・タ・ブリュム、270 p. 1968 年ルノド賞</p> <p>「暴力を行う義務」は力強い、そして斬新な作品であり、アフリカ大陸を描くカルト小説だ。歴史大河小説であるこの作品は 13 世紀にまで遡り、神話上のナケム帝国の征服者であり指導者である、サイフ族の武勲詩を物語っている。暴行、犯罪を語ることには度外れた力量をもつ作家であるヤンボ・ウオロゲムが、奴隷制度と植民地支配が西洋人の到着よりも前にさえ始まっていたアフリカの歴史の複雑さを語る。西洋人たちは、既にある非人間的システムを劇的に拡大して、彼らのために利用しただけなのかもしれない。</p>
---	--

## ルワンダ


	<p>シヨラスティック・ムカソング、『ノートルダム・デュ・ニル』、ガリマール / コレクション「黒い大陸」、240 p. 2012 年ルノド一賞、2012 年アマドゥー・クルマ賞</p> <p>ルワンダにあるコンゴ-ナイル嶺の高地にある女子高校は、高度 2500 メートルに位置し、ナイル川の源泉がすぐそばにある。少女たちの家族は、人里を離れ、交通の便もなく、首都にある誘惑から遠い、この聖女の名のついた平穏な地になれば、娘たちが結婚まで処女でいられると期待している。彼女たちは、血と家系で結ばれた一族の利益に従った結婚を定められているのだ。この圧倒的で美しい自然の中にも、禁忌を脅かす多くの出来事がおきる。またそこでのツチ族の女子生徒の数は、『部族間』の基準によって厳しく一割までと決められている。</p> <p>まもなくツツ・パワーの手先によって包囲されるこの女子高生たちが生きなければならない逃げ場のない場所、青春期に経験する友情、望み、憎悪、政治闘争、陰謀、部族間殺人の扇動、最初は陰険に後におおっぴらに行われる迫害、夢をそして幻滅、生き残る希望。すなわち、この実存的マイクロコスモスにおいて展開される、完璧なエクリチュールによる、典型的なルワンダのジェノサイドへの序章であり、読者はそこにある真実に魅了されるのである。</p>
--	--

## カメルーン


	<p>レオノラ・ミアノ、『影の季節』、グラッセ、240p. 2013 年フェミナ賞</p> <p>サブ(南)サハラアフリカ、内陸にあるムルンゴ族の集落では、長子たちが消え去り、彼らの母親たちは他の者たちと隔てられたところに集められている。どのような不幸がこの村に襲いかかったところなのだろうか。消えた長子たちの居場所を知るために、部族の密使として族長のムカノと勇氣ある 3 人の母親たちが、秘伝として伝授された方法で危険な探索を行う間に謎をつきとめていく。彼らの隣人であるBWele 族たちが消えた長子たちを捕らえたのであり、河川を下って北からやってきた外国人たちに売ってしまったのだ。</p>
---	---

その他の推奨作家：アシル・ムベムベ

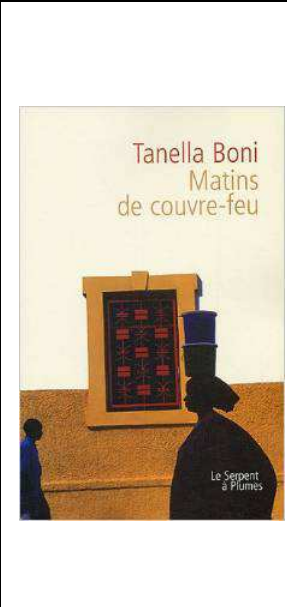
## ギアナ

	<p>リバー・M・フォファナ、『ある未完成な女の不思議な夢』、ガリマール / コレクション「黒い大陸」、208 p.</p> <p>ハワの美貌、そのほとんど健常人と変わらない身体は、ごく幼い頃から彼女にお世辞と好意を惹きつける。それは怪物のようにも見える、ハワの双子(以上)の姉妹、トゥムブー(『アスティコ』)には得られないものだ。この言葉にはだされない苦しみ次第に憎しみに変わっていく。ハワは愛を、トゥムブーは大臣になることを夢見ている。ではどうしたら、悲劇的なそしておかしな自然の仕業によって肉体が結びついたこの二人が、それぞれ自分の夢をもつことができるのか。苦難を背負う共通の道を歩むシャム双生児の姉妹が、将来おのおのの運命をもつことができるのだろうか。</p>
---	--

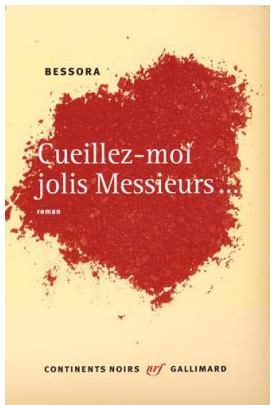
## ベナン

	<p>フロラン・クアオーゾッティ、『もし羊の小屋が汚くても、豚に言われる筋合いはない』、セルパン・タ・プリュム、200 p. 2010年アマドゥー・クルマ賞</p> <p>ベナンの首都、コトヌの汚らしい喧騒の中で、娼婦に身を落としていた元ミス・ベナンの若い女性の死体が発見された。麻薬の売買に絡んでいたらしく、彼女の死体とともに大金に値するスーツケースが残っていたが、間もなく彼女の友人のひとり、大金と交換するためにそのケースを取りに来るだろう。そうだ、でも実際、この俗悪な社会ではスマインやその片腕の男のような危険な男たちとかかわりあうことになる。たとえ私立探偵SDKに助けを求めたとしても、面倒な出来事を覚悟しておかないといけない…</p>
--	--

## コート・ジボワール


	<p>タネラ・ボニ、『灯火管制の朝』、セルパン・タ・プリュム、315 p. 2005年アマドゥー・クルマ賞</p> <p>この小説は現在、コート・ジボワール、さらに、人民が人質となっているすべての国々を引き裂いている悲劇を描いている。政治体制が不安定で、絶え間ない誘拐が行われ、二つのグループを野蛮な行為に至るまで対立させている。タネラ・ボニは、秘密警察とその権謀術策にたけたボス、アルセーヌ・Kの嫌がらせの的になっている語り手の女性によって生きられた受難を語る。この男は9ヶ月の間彼女を居住地として指定し、「彼女の魂を妊娠させる」ことになる。彼女にとってそれは彼女の人生について再考し、彼女の家系にある偉大な女たちを思い出す機会であり、とりわけ、酷い仕打ちを耐え忍んだ彼女の母の思い出に浸った。彼女自身がそうしたくなかったこと、彼女にはできないこととは、ティモテを愛し続けることだった。女好きのする男。常に不在の、絶え間ない浮気を決して償うことのないその男を。自らの内にはらむ悪魔に囚われたコート・ジボワールの社会—貧困、民族差別、暴力、権力の陶醉、殺人のための少年兵、死が多くの家族を後先無しに捕らえる時に見る灯火管制の夜と夜明けの様々な風景—を、時に残忍な、しかしユーモアにあふれた風刺で描く作品。</p>
---	--

## ガボン

	<p>ベッソラ、『素敵な紳士の皆様、私を迎えてください…』ガリマール / コレクション「黒い大陸」、292 p. 2007年黒いアフリカ文学大賞</p> <p>彼女の名はクレール。「岩清水のように清明な」という意味だ。しかし突然、わけもなく、HIVウイルスが彼女の体内に宿ってからは、彼女の視力が衰えてきた。そしてあまりにも見えづらくなったので、もうお終いにしたくなっている。もうひとりの名はジュリエット。アフリカ人の未亡人で子どもが二人、一文無しの作家で必死に住む家を探している。彼女は夜中にセーナ川の上のある橋から飛び込もうとしていたクレールの人生に飛び込んで来た。そしてクレールのアパートマンに、HIVウイルスのように、隠し持った酒の壺と、末娘のオシャブリと、長男の癩癩の発作と、彼女の美しいお尻とともに居座ってしまう。クレールは彼女を嫌悪し、ねたみもするが、もはや命の恩人である彼女なしには生きていけない。しかし何のための命なのか？</p>
---	--

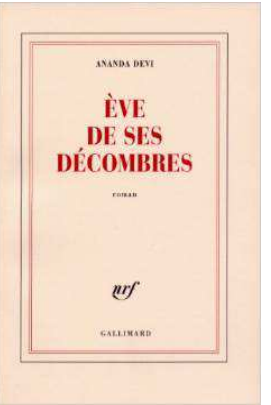
## 中東



### イラン

	<p>ダリユーシュ・シェガン、『混血の意識』、アルバン・ミッシェル、274 p. 2012年フランコフォニー大賞</p> <p>啓蒙主義者たちの合理主義、預言者降誕を信仰する宗教の伝統、民主主義の要請の間で揺れる今日の世界をどう考えるべきなのか。</p> <p>近東と西洋のいずれにも共通の人々の意識の「あり方」とはどういったものなのか。ヨーロッパとその普遍的原理が、我を見失った近東にもたらすインパクトを分析することにより、ダリユーシュ・シェガンは複数の文明を対立させることのない「遊牧の思想」の新しい仕組みを定義し、一方で政治的一般化をはばみ、私たちの世界観の変容を探る。「混血の意識」はまた、30年以上前に宗教のイデオロギー化の概念を提唱した、東西関係の指導的哲学者の一人の独創的な知的変遷をも物語る。著者にとっては哲学をすることが哲学、歴史、神秘哲学にとどまらず、すべて創造の形式、特に文学にもおよぶのである。</p>
--	---

## インド洋

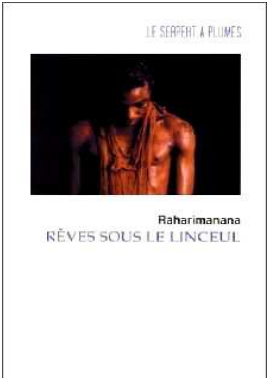
### モーリス

	<p>アナンダ・デヴィ、『イヴとその残骸』、ガリマール、155 p. 2006年フランコフォニー5大陸賞、2006年RFO du livre賞</p> <p>僕はサディク。みんなが僕をサドと呼ぶ。悲しみと残酷の間の境界線は細い。イヴは僕の生きがいだ、でも彼女はそんなことは知らないと言い張る。僕とすれ違う時、彼女の視線は僕の上では止まらずに、そのまま通り抜けてしまう。僕は消滅する。僕は灰色の場所にいる。いやむしろ黄色がかかった茶色で、その名にふさわしいものだ。茶色の穴(トルウマロン)。茶色の穴、それはすり鉢の底の穴のようなものだ。国ひとつ分の全ての汚水がそこに流れ込む最後の湾口だ。</p> <p>サド、イヴ、サヴィタ、クレリオ、このおぞましい運命の罠にかかった少年たちと、暴力を宿すエクリチュールによって極めて繊細なサスペンスを描きながら、アナンダ・デヴィは21世紀のもうひとつのモーリス島を、観光用パンフレットには描かれていないその島を物語る。</p>
---	--

 <p>Le dernier frère Nathacha Appanah</p>  <p>Éditions de l'olivier</p>	<p>ナタシャ・アパナ、『最後の兄弟』、ロリヴィエ、216 p. 2007年Fnac小説賞</p> <p>ダヴィッドが夢に現れるとき、ラージは幼年時代に逆戻りをしている。そこに蘇る情景は砂糖黍の畑、暴力を振るう父、母の愛情、兄弟たちと川のそばで遊んだこと、焼け付くような太陽、豪雨だ。サイクロンによって吹き飛ばされたかりそめの幸福。そして謎に包まれた難民たちが生活する収容所のそばに一家は居をかまえる。</p> <p>1940年12月26日、アトランチック号はポール・ルーイの港に、パレスチナから追い出され、当時英国領であったモーリス島に強制送還されてきた1500人あまりのユダヤ人を上陸させる。この時代にはまだラージは世界についても、そこで起こっている悲劇の数々についても何も知らなかったのだ。</p>
---	--

その他の推奨作家：カルル・ド スーザ

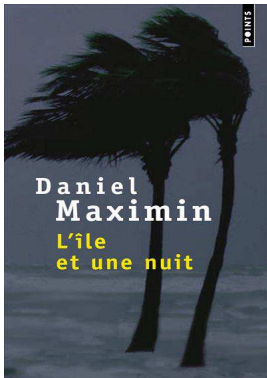
## マダガスカル

 <p>LE SÉPULT À PLUMES</p> <p>Raharimanana RÊVES SOUS LE LINCEUL</p>	<p>ジャン・リュック・ラハリマナナ、『屍衣の下の夢』、セルパン・タ・ブリュム、134 p.</p> <p>ソファに心地よくおさまって、ある男-証人-がテレビを眺めている。そこには世界があるがままの姿で映っている。すなわち、うまくいっていない。戦争が起き、あらゆる生が否定されている。現実の断片と幻覚が渾然と交じり合うまで、見るようにと与えられたものを検討することが、この短編集の主要なテーマである。息絶える時に、そして死の淵で書かれたように閃きを放つ、詩的な14作品で構成されている。『Lucarne』の著者はこの作品でマダガスカルの魂の解剖を呪術的な方法に則って、追跡するのである。</p>
--	---

その他の推奨作家：ミッシェル・ラコトソン

## フランス領カライブ

### グアドループ

 <p>Daniel Maximin L'île et une nuit</p>	<p>ダニエル・マキシマン、『島とある一夜』、スイユ、266 p.</p> <p>グアドループの上に風が立ち、島の周りの海が盛り上がり、サイクロンが近づいていることを告げている。マリー・ガブリエルは、彼女のクレオール式の古い家に独り留まり、洪水に備えている。扉と窓を釘で打ちつけ、持っているろうそくを集め、水と食料の貯えをする。これからの7時間は激しいものになるだろう。しかしそれは、ノスタルジーと思い出にあふれ、そして希望にもあふれた時間となるのだ。</p> <p>ダニエル・マキシマンは1947年にグアドループで生まれた。「島とある一夜」は彼の最初の2作品-『L'isolé Soleil』と『Soufrières』(両作品ともポワン社刊)-の系譜に属する小説である。自伝的な最新作『Tu, c'est l'enfance』は、アカデミーフランセーズ・モーリス-ジュヌヴォワ大賞とトロピック賞を受賞した。</p>
---	--



	<p><b>エルネスト・ペパン、『毒の島』、デネル、183 p.</b></p> <p>迷信、セックス、無為、麻薬、酒、そしてゴーゴーパーティ…怒り、希望、絶望、愛、ユーモアが沸き立つこの楽園の島、しかし特に祖国の「魂の声」については完全な集団的記憶喪失状態のこの島での、社会のマーギナルとして置き去りにされている最も脆弱な人々の中にいる若者たちのグループの日常を描く作品。</p> <p>この小説はグアドループのもっとも複雑な側面を描き出している。この国はその歴史と過去を白紙に戻すことによって近代化することができるのであろうに、そして、散発的に暴力が炸裂する時には問題提起をするのだが、すぐにまた忘却に陥ってしまう国なのである。</p>
--	--

**その他の推奨作家：**  
シモーヌ・シュワルツバール / ジゼル・ピノート

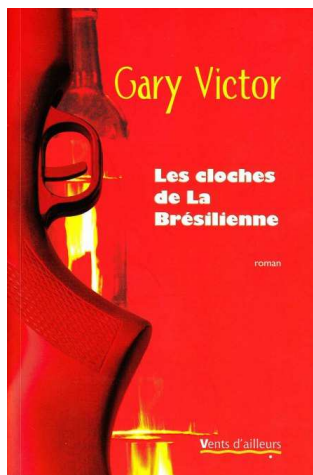
## マルチニーク

	<p><b>ジャン・ベルナベ、『黒人の恨み』、メモワール・デクリール、305 p.</b></p> <p>エメ・セゼールへのオマージュとして書かれた小説『黒人の恨み』は、螺旋形式で構成されている。21章からなる本文は、セゼールとの交流、アンティール諸島との関係を描いている。フィクション、風刺、詩、ユーモアといった様々なジャンルとテーマを交互に取り入れながら、本書は、言語と形式が交差するひとつの地点となっている。</p>
--	---

**その他の推奨作家：** スザンヌ・ドラシウス

## ハイチ

	<p><b>リオネル・トルイヨ、『美しい人間愛』、アクト・スユッド、バベル、176 p.</b> 2011年メティス小説賞グランプリ受賞</p> <p>カリブ海沿岸の小さな村に、ひとりの若い西洋人女性がやって来た、父親の姿を追い求めて。この家族的な小説を構成している謎を復讐するかのように解き明かしていく。彼女が綴る物語を通して、一人一人が本質的な問いを投げかけていく。「世界に存在する目的は何なのか？」その問いが、対峙する意識の共有、人間に必要な博愛像を明らかにしていく。そこには世界が自分のものであると思い込んでいる者たちのおぞましい欲望が立ちはだかる。</p>
--	---

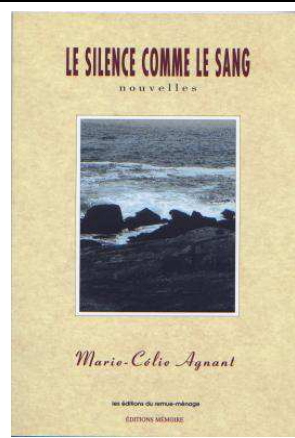


ゲイリー・ヴィクトール、『ブラジル女の鐘』、ヴァン・ダイユール、224 p.  
2008 年カリブ文学賞受賞

“ここは、ポルトープランスから遠い山の中にある失われた小さな町。”  
“ブラジル女の鐘”は、守護聖人の祝日の間中もずっと止まったままだ。  
主任司祭ルフェネック神父の強い要望により、国家警察は、アゼマール・デューソワルエ（Dieu-soit-loué＝神は貸し出される）視察官にこの奇妙な、しかし実際に起きた難問題を解決する任務を託した。警察の捜査が続く中、市長と代議士、司祭と福音主義セクトの牧師、魔術秘密結社信徒とドラッグディーラーを対立させる権力の冷血な敵対関係が否応なく明らかになる。墮落し、自分たちの利益だけを援用しようとした人たち。想像を超えた事件だ。

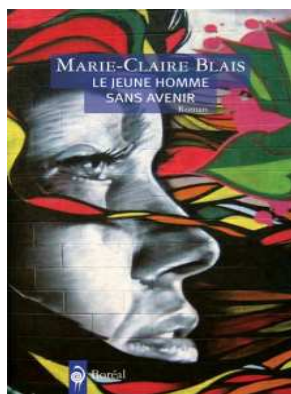
その他の推奨作家：ジャン・メテリルス / デペストル・ルネ

## ケベック



マリー＝セリー・アニャン、『血のような沈黙』、ルミュ・メナージュ、101p.  
カナダ総督文学賞

『血のような沈黙』を構成する 5 つの短編は、留まった男女達、出て行った別の者達、戻ってきてそして再び出て行く幾人かの者達との彼岸での出来事だ。誰もが、作家が再現する凡庸でありながら本能を抑えた記憶に取り憑かれている。ある者達は、女王、女司令官のように死にゆくために床につき、別の者達は、アントニオのように、フロールの心地よい腕よりも戦う事を選ぶ。誰が裏切り者なのか？誰が友人なのか？留まるのか？出て行くのか？出て行こうとも、あるいは留まろうとも、記憶は残存する。



マリ＝クレール・ブレ、『未来のない青年』、Boréal、306 p.  
モントリオール文学賞

ある作家の男が、窓から海を一望する南の島の空港で、自分が搭乗する便の遅延のせいで足止めされている。かつての神童であったミュージシャンの青年は、自分の犬を連れて路上で生活をしながら、何を夕食に調達できるだろうかと考えている。リトル・アッシュは、昔のように女装した男達と、もう踊ることも歌うこともなくなり、ドラッグ・クイーンのパーティーに出向くためにベッドから出ることを拒む。この三つの世界を重ね合わせながら、マリ＝クレール・ブレは、「渴望」という名の小説的組曲を織りなす世界を読み解くという大胆な試みを追求する。

その他の推奨作家：ヴィクトール・レヴィ・ボーリウ / ナイム・カタン / ルジャン・デュシャルム